**例題**

**次の文章を読んで、後の設問に答えよ。**

ここらの物語書どもの中に、此物がたりは、ことにすぐれてめでたき物にして、大かたさきにも後にも、たぐひなし。まづこれよりさきなる、ふる物語どもは、何事も、さしも深く、心をいれて書けりとしも見えず、ただ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事をむねとし、A おどろおどろしきさまの事多くなどして、いづれもいづれも、物のあはれなるすぢなどは、さしもこまやかにふかくはあらず。又これより後の物どもは、［X］などは、何事も、もはら此物がたりのさまをならひて、心をいれたりとは見ゆるものから、こよなくおとれり。其外もみなことなることなし。ただ此物語ぞ、こよなくて、殊に深く、よろづに心をいれて書ける①物にして、すべての文詞のめでたきことは、さらにもいは［Y］、よにふる人のたたずまひ、春夏秋冬をりをりの空のけしき、木草のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、その人々の、けはひ心ばせを、おのおのことことに書き分けて、ほめたるさまなども、皆其人其人の、けはひ心ばへにしたがひて、一様なら［Y］、よく分れて、B うつつの人にあひ見るごとく、おしはからるる②など、C おぼろげの筆の、かけても及ぶべきさまにあら［Y］。

**問一** ［X］に入る最も適切な物語名を、次の**ア**～**エ**の中から選び、記号で答えよ。

**ア** 宇津保物語　**イ** 伊勢物語　**ウ** 狭衣物語　**エ** 竹取物語

（　　）

**問二** ［Y］に共通して入る助動詞を、一字で記せ。

（　　）

**問三** 二重傍線部①「る」、②「るる」を文法的に説明せよ。

①（　　）

②（　　）

**出典**

「源氏物語玉の小櫛」

江戸時代、寛政八年（一七九六）成立、十一年刊。「源氏物語」の注釈書、全九巻九冊。本居宣長著。巻一と巻二は総論、巻三は年立ての考証、巻四は「湖月抄」を底本とする異本との校合、巻五以下は語句の注釈という構成。特に総論で展開された「もののあはれ」論は、儒教的・仏教的文学観をしりぞけ、感情を重視する文学の独自性を認めようとする見解であり、重要である。

**重要古語**

◇ここらの＝たくさんの。
◇此物がたり＝「源氏物語」を指す。
◇物のあはれなるすぢ＝しみじみとした情趣といった方面。
◇文詞＝文章の言葉遣い。
◇世にふる人＝この世に生きる人。
◇心ばせ・心ばへ＝性格、気立て。

Sample

**問四**　傍線部A～Cの語の意味として最も適切なものを、それぞれ**ア**～**エ**の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

A　**ア**　恐ろしい　**イ**　乱れた　**ウ**　大げさな　**エ**　不吉な　（　　）

B　**ア**　夢の中　**イ**　現実　**ウ**　正気　**エ**　理想　（　　）

C　**ア**　はっきりしない　**イ**　頼りない　**ウ**　並ひと通りの　**エ**　普通ではない　（　　）

**問五**　本文を三つの段落に分けるとすると、第二段落はどこからどこまでか。初めと終わりの五字を抜き出して記せ。（句読点を含む。）

［　　］～［　　］

**解法と学習の手引き**

**太字の部分の単語や語法の解説をヒントに例題の問題を考えてみよう。**

**ここらの**物語書どもの中に、此物がたりは、ことにすぐれてめでたき物にして、大かたさきにも後にも、たぐひなし。まづこれよりさきなる、**ふる物語**ども（古い物語）は、何事も、さしも深く、心をいれて書け**り**（存続）とし**も**見えず（打消）、ただ一わたり**に**（断定）て、あるはめづらかに興ある事をむねとし、**おどろおどろしき**（大げさな）さまの事多くなどして、いづれもいづれも、**物のあはれなるすぢ**（しみじみとした情趣といった方面のこと）などは、さしもこまやかにふかくはあら**ず**（打消）。又これより後の物どもは、［　X　］などは、何事も、**もはら**（すべて）此物がたりのさまをならひて、心をいれ**たり**（存続）とは見ゆるものから、**こよなく**（格別に）おとれ**り**（存続）。其外（そのほか）もみなことなることなし。ただ此物語**ぞ**（係助〈結び流れ〉）、**こよなくて**（このうえなくすばらしくて）、殊（こと）に深く、よろづに心をいれて書け**る**（存続）①物にして、すべての**文詞**（文章の言葉づかい）のめでたきことは、**さらにもいは**（言うまでもなく）［　Y　］、**よにふる人**（この世に生きている人）のたたずまひ、春夏秋冬をりをりの空のけしき、木草のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、その人々の、けはひ（性格）**心ばせ**を、おのおのことことに書き分けて、ほめ**たる**（存続）さまなども、皆其人（そのひと）其人の、けはひ（性格）**心ばへ**にしたがひて、**一様**（ひとやう）**なら**（形容動詞）［　Y　］（同じようではなく）、よく分れて、**うつつ**（実在する）の人にあひ見る**ごとく**（比況）、おしはか**らるる**②（自発）など、（自然と想像できる）**おぼろげ**（語幹）の筆の、**かけても**（まったく）及ぶ**べき**（可能）さま**に**（断定）あら［　Y　］。

**ヒント**

**問一**　「源氏物語」以前に成立した作り物語は、三作品のみ現存する。古典文学史の基本事項である。その三作品以外のものが入る。

**問二**　助動詞の接続に注意。上はすべて未然形である。また、「さらに」「かけて」は、下に決まった表現を要求する呼応の副詞である。

**問三**　助動詞である。接続に注意して見分ける。

**問四**　いずれも基本的かつ重要単語である。文脈から意味を追ってみよう。

**問五**　この文章は、「源氏物語」のすばらしさを、他の作品と比較して検証しているもの。他の作品について具体的に述べているのはどこからどこまでか。

Sample

**次の文章を読んで、後の設問に答えよ。**

昔のやうの宮ばらの御ありさま、あまたうけたまはる中に、大斎院こそ、めでたくおはしましけむとおぼ[X]えさせたまへ。ただ今の時の后にておはしまさむ[a]御方々は、華やかに今めかしくも、また、心にくくもおはしまさむ、①ことわりなり。これは、いつもめづらしからぬ常磐の蔭にて、有栖川の音より外は人目稀なる御住まひにて、いつもたゆみなくおはしましけむほどこそ、限りなくめでたくおぼえさせたまへ。

さりながら、御年なども若くおはしまさむほどは、ことわりなりや。むげに老い衰へ、御世も末になりて、[Y]そのかみ参り慣れてはべりけむ人もをさをさなく、今の世の人も②はかばかしく参ることもなき末の世になりてしも、九月十日余日の月明かかりけるに、雲林院の不断の念仏の果てに参りたりける殿上人、四五人ばかり、帰さに、本院の御門の細めに開きたるより、③やをら入りて、昔より④心にくく言はれさせたまふ院のうち、忍びて見むと思ひけるに、人の音もせず、しめじめとありけるに、御前の前栽心にまかせて高く生ひ茂るを、露は月の光に照らされてきらめきわたり、虫の声々かしがましきまで聞こえ、遣水の音のどやかにて、[b]船岡の颪、風冷ややかに吹きわたりけるに、御前の簾少しはたらきて、薫物の香、いとかうばしく匂ひ出でたりけるだに、[Z]今まで御格子も参らで月など御覧じけるにやと、あさましくめでたくおぼえけるに、奥深く、箏の琴を平調に調べられたる声、ほのかに聞こえたりける、さは、かかることこそと、めづらかにおぼえける、ことわりなり。

（注）○大斎院＝五代の帝の御代にわたって斎院を務めた選子内親王。　○本院＝斎院の御所。

**問一**　傍線部①～④の語句の意味を記せ。

①〔　　〕　②〔　　〕

**出典**

「無名草子」

鎌倉時代時代初期（一二〇二年頃）の成立。筆者は藤原俊成女かと言われている。物語評論で、「源氏物語」が多く言及されている。歴史物語「大鏡」の形式に影響を受け、会話形式で老尼が女房たちの話を聞くというもの。

**重要古語**

◇斎院＝京都の賀茂神社に奉仕した未婚の内親王や女王、また斎院の御所を指す。
◇有栖川＝斎院御所のそばを流れていた川。
◇不断の念仏の果て＝期間を定めて昼夜念仏を唱える、その最後の日。
◇帰さに＝帰る途中に。
◇前栽＝庭の草木。植え込み。
◇はたらきて＝動いて。

sample

③〔　　〕　④〔　　〕

**問二**　傍線部a・bの「む」と文法上の用法が同じものを次の**ア**～**エ**の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

**ア**　いとやすきこと、たしかに守り侍らむ。　**イ**　子といふもの、なくてありなむ。

**ウ**　少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ。　**エ**　これが花の咲かむ折は、来むよ。

a〔　　〕　b〔　　〕

**問三**　傍線部X「おぼえさせたまへ」を品詞分解してそれぞれ文法的に説明し、現代語訳せよ。

品詞分解〔　　〕

現代語訳〔　　〕

**問四**　傍線部Y「そのかみ参り慣れてはべりけむ人もをさをさなく」について、「そのかみ」の内容を明らかにして、四十字以内で解釈を記せ。

**問五**　傍線部Zの説明として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えよ。

**ア**　大斎院が夜明けまで格子も下ろさず月を観賞していたことを、殿上人たちは慎みがない行為であると残念に思っている。

**イ**　大斎院が夜更けまで格子も下ろさず月を見ていたことを、殿上人たちは驚きつつ、情趣のある態度だと称賛している。

**ウ**　若い后たちが、自分たちが来るまで格子を開け放して待っていたことを、殿上人は光栄でありがたいことだと喜んでいる。

**エ**　若い后たちが、夜明けまで格子を下ろさず月を見ていたことを、殿上人たちは風流ではあるが行き過ぎだとあきれている。〔　　〕

**問六**　冒頭の「昔のやう（なり）」と反対の意味をもつ単語を本文中から抜き出し、終止形で記せ。〔　　〕

Sample

**ヒント**

**問一**　いずれも重要単語。②「はかばかし」は、文脈に合う訳を考える。

**問二**　助動詞「む」は、文中用法と文末用法に分かれる。さらに、意味は主体が一人称、二人称、三人称かによって判別できる。

**問三**　「おぼゆ」の訳し方に注意する。

**問四**　「そのかみ」は「その当時」。どのような時代であったのか。呼応の副詞「をさをさ」、敬語「侍り」の用法に注意する。

**問五**　「めでたし」に注目。何についての評価か。

**問六**　「昔のやう（なり）」とは、昔風・古風であるということ。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

重之

雪ふればあしげに見ゆるいこま山
幸文太

いつなつかげにならむとすらむ

これは、為正が、河内の守にて侍りける時、雪の降りたりける朝に、つれづれなりければ、かみのさうしを
たてこめて、郎党どもを呼びあつめて、酒などのみけるに、源重之が、ものへまかるついでに、まうで
来たりければ、よろこび騒ぎて、饗じける。おのおの酔ひて、さうしを押しあけて、眺めやるに、雪に埋れ
たる山の見えければ、「あれは、いづれの山ぞ」と、問ひければ、「あれこそは、高名のいこまの山よ」と、
為正がいひけるを聞きて、かく申したりけるを、たびたび詠じて、付けむとしけるに、いかにも、え付けざ
りけるけしきを見て、かくしあるきける、①あやしのさぶらひの付けたり。げに、けしきの見えで、そらしは
ぶき高やかにして、人よりけに、ゐいでて、Xけしきしければ、重之見て、「幸文太こそ、付けげに侍れ」と
いひければ、為正、「Yかたはらいたく、みぐるしき事なり」と押しこめて、いはせざりければ、引き入りて
やみにけり。なほ、為正、え付けで、程すぎにければ、②わびて、「さば申せ。いかに付けたるぞ」と問ひけ
れば、しばし、きそくしていはざりければ、重之、しきりにせめければ、いひいでたりけるに、為正、した
なきしてあさみけり。重之、聞きけるままに、立ちて舞ひければ、えたへで、きぬぬぎて、③かづけてける。
まことに、さむげなりけるに、きぬくれて、のけはりて出できたりけるけしき、いみじかりけりとぞ。

（注）○重之＝源重之。平安中期の歌人。　○幸文太＝国司の庁の下侍。　○為正＝人名。未詳。
○あしげ＝葦毛。馬の毛色で、白に褐色や黒色がまじる。　○かげ＝鹿毛。馬の毛色で、茶褐色に黒がまじる。

**出典**

「俊頼髄脳」（別名「俊頼口伝」）

平安時代後期、十二世紀前半の書。筆者の源俊頼は五番目の勅撰和歌集「金葉和歌集」の撰者。本書は、関白藤原忠実の娘への、作歌手引き書として記述されたと言われている。

**重要古語**

◇いこま山＝生駒山。生駒市（奈良県）と東大阪市の境にある山。
◇河内＝現在の大阪南部の地域。
◇郎党＝家来。従者。「郎等」とも書く。
◇饗ず＝食べ物や酒でもてなすこと。
◇そらしはぶき＝空咳。
◇人よりけに、ゐいでて＝人々の間からいっそう目立つように、いざり出てきて。
◇かくしあるきける＝「此く為歩きける」か。このようにしてまわっている。
◇したなきしてあさみけり＝舌打ちして驚きあきれた。
◇のけはりて＝胸を張って。

Sample

**問一**　波線部a～dの文法的説明として適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つずつ選び、記号で答えよ。（同じ記号を何度選んでもよい。）

**ア**　断定の助動詞　**イ**　伝聞・推定の助動詞　**ウ**　動詞　**エ**　形容動詞の一部

a〔　　〕　b〔　　〕　c〔　　〕　d〔　　〕

**問二**　傍線部①～③について、現代語訳せよ。

①〔　　〕　②〔　　〕　③〔　　〕

**問三**　傍線部Xについて、誰が、どのような「けしき（様子、態度）」をしたのか。次の空欄を埋めて答えよ。ただし、「誰」は五字以内で本文中から抜き出し、「けしき」については二十五字以内で書くこと。

［　　］が、［　　］とする態度を見せたということ。

**問四**　傍線部Y「かたはらいたく、みぐるしき事」の解釈として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えよ。

**ア**　客に対して気の毒で、気の利かないこと　**イ**　客が単なる傍観者になり、申し訳ないこと
**ウ**　客が笑い出したくなり、我慢できないこと　**エ**　客に対してきまりが悪く、みっともないこと

〔　　〕

**問五**　次の文は、冒頭の連歌の説明である。文中の空欄A～Dにあてはまる語を、漢字で入れよ。

上の句では、「いこま山（生駒山）」という名を聞いたので、雪のかかった山の姿を［A］の毛色である［B］に見立て、下の句ではその毛色は夏になれば［C］に変わる、つまり、いこま山はいつになったら木々の生い茂る［D］に変わるのだろう、と季節を展開して応じてみせた。

A［　　］　B［　　］　C［　　］　D［　　］

**問六**　本文の内容に合致するものを、次の**ア**～**オ**の中から二つ選び、記号で答えよ。

**ア**　為正は、重之のために酒席を用意して待っていた。
**イ**　幸文太は、あちこちで連歌に親しみ、付句を得意としていた。
**ウ**　重之は、普段から幸文太と連歌をする仲であった。
**エ**　重之の句に付句ができたのは、幸文太だけであった。
**オ**　付句の出来をほめられた幸文太は、胸を張って得意げに宴席を後にした。

〔　　〕〔　　〕

**ヒント**

**問一**　「なら」「なり」「なる」「なれ」の識別問題は頻出。助動詞は接続に注意する。

**問二**　①「あやし＋の」である。②「わぶ」、③「かづく」の意味を考える。

**問三**　後の重之の「幸文太こそ、付けげに侍れ」という言葉から考える。

**問四**　「かたはらいたし」は、よくないことをしでかしてしまった本人の気持ちと、それを周りで見ている側の気持ちの双方の訳し方がある。

**問五**　「注」や「重要古語」を手がかりにする。「駒」には馬の意がある。幸文太の句中の「なつかげ」は掛詞（かけことば）。

**問六**　主語をきちんと判定するのが重要である。

Sample